

赤軍詩集

1. 1972

赤軍兵士 福岡 信孝

赤軍詩集前記

- I たたかい
- II 地獄の叫び声
- III 戦場へ

赤軍詩集

第Ⅰ部 たたかい

就義柴野烈士に捧げる「十二月の寒い日に・・・」そのⅠ／そのⅡ／ベトナム八月革命二六周年に寄せて／九人の戦士／夏の死／転向／夜の帳の中から／熱い朝／疲れた都会の夜／都会での時間／都会での休息／思い出／科学の悲劇、もしくは二十世紀文化の末路／進め赤い兵士よ

僕の詩は、いわゆる詩ではないかもしれない。かつて、僕はもつと詩らしい詩を書いてきた。具象化された観念的な詩を書いてきた。今の僕の詩は文学の無力さに打ちひしがれて四年以上も前に一度筆を折つた後の詩ではない。僕は文学よりも階級闘争を選んだ。そして、共産主義者となつた。僕は今、史的唯物論の立場に立ち、弁証法的唯物論を武器としている。弁証法は科学であり、論理的だ。文学の世界に長く居た僕も、やつと新しい水に慣れた。その時、僕は獄中に居た。そして今、再び詩らしきものを書いてゐる。今の僕の詩は、詩というよりも諷刺的な煽動的な散文的な文章に過ぎないかもしれない。それでも僕は良いと思つてゐる。僕は今になつて、文学はフィクションであることに気が付いた。単純なことなのです。フィクションであることは、対象を認識するのに客体に主観を加えて創造することなのです。日本共産党の悪しき文学論の旗手蔵原はベリンスキーの理論をウのみにして、認識内容論という誤まつた反映論をふりかざしました。蔵原の理論だと、共産主義者が共産主義的対象をそのまま描いた作品が真に芸術作品となるのです。要するにプロレタリアの姿をプロレタリアの立場で書いたものは全て芸術作品であつて、その他はブルジョワ的な唾棄すべきものなのです。これは実は観念論なのです。マルクス主義の原則は存在（物質）が意識を決定するのです。ですから、例えばプロレタリア的なものであろうと、存在することにより認識はなされるのであつてプロレタリアの認識の中に入らないものは非存在とすることはできないのです。認識しようとしまいと存在しているのです。蔵原は文学が主体の客体に対する客観的認識を主観的な関係において文学に現わすものであることに気がつかず、文学がフィクションであり文学が単なる認識でも、又対象にその内容があるのではないことに気がつかなくなつたのです。僕は反映論としての社会主義リアリズムを否定しようとは思わないし、又全面的に

肯定もできないでいる。今は僕は共産主義者としての史的唯物論と、文学的を観念に書めさい悩まされている。いつの日か革命的な詩をのんびり書いてみたいと思っている。今の僕の詩は詩ではないかもしれないけれど、今の僕にはこんを詩しか書けない。今の僕は本当は詩よりも、ゲリラ兵士として死んでいくことをいつも考えているのです。

就義柴野烈士に捧げる

「十二月の寒い日に……」そのI

師走の寒い日

君は勇敢に闘い

兇弾に倒れました。

擬似の平和を打ち砕いた

君の雄叫びは

日本中の静寂を破り

全国に鳴り響き

支配者の血を震憾させました

君の雄叫びは

闘う者を奮い立たせ

闘う方向を指し示しました。

兇弾ニ流サレタ君ノ血ハ

汚レナイ赤色デス

闘ウ者ノ真紅ノ旗ヲ

鮮カニ染メル赤色デス

師走の寒い日の

君の雄叫びは

鋭く私の胸に迫り

真の友を教えました

見知らぬ君も

同じ星を目指していたのですね

闘う者の

赤い星を見つめていたのですね

君の戦死はくやしく、悲しいことです

でも、涙を流すのは止めます

赤い星への道は

険しく峻しく危険です

勝利の日まで

一日の安息もありません

涙は勝利の日まで忘れます

同志柴野よ

安らかに眠れ

メモ

辛亥革命に先がけて、革命とは武装行動であると確信し行動しようとした『光復会』の秋瑾女史が刑死したのは一九〇七年です。秋瑾女史伝によると「就義」とは革命のために死んだ人に付けられる言葉です。柴野同志の革命家としての勇敢さに「就義」を付けました。柴野同志の戦死した一九七〇年の十二月は、再びポーランドで暴動が発生し、まさに現代過渡期世界が煮つまっていることを示していました。三ブロック（帝国主義国、労働者国家、後進国）階級闘争の推進こそが、現代過渡期世界を止揚すべきものであり、帝国主義国における我々の任務は徹底した武装闘争を本国において開始することです。私達は柴野同志の勇敢を聞いて学ばなくてはなりません。

就義柴野烈士に捧げる

「十二月の寒い日に……」 そのII

北風の吹きすさぶ

十二月の寒い日

冬將軍の統治する

肺病やみの都会の中で

凍りついた欺瞞の平和を

鋭く切り裂く

闘いの雄叫びがあがつた

情性に身を委ね

奈落への階段を昇つていった

肺病やみの血管は

擬似の安静の夢を破られ

静寂と安定の支えを失い

身体中に寒風が吹きぬけ

悪感に全身をふるわせた

トス黒く汚れきり

膿の溜つた黒い血管は

恐怖におののき

臓器を震撼させ

全ゆる膿どもをかりたてて

赤い雄叫びに襲いかかり

兇刃を打ちおろした

汚れきつた醜い血管の中で

兇刃に流された赤い血は

鮮かに真紅に映え

流れ落ちる最後の一滴まで

腐敗した膿どもに抗い

蝕まれた全身に付着し

赤い血の芽を植えつけた

生気を失い惰眠をむさぼる

肺病やみの都会の中で

赤い血の雄叫びは

兇刃の虐殺に呪いをかけ

全ゆる呪縛を打ち壊し

厳寒の荒野に赤い芽を育て

二組の開拓者を結びあわせた

十二月の寒し日

見知らぬ二組の開拓者たちは

赤い芽の成育を誓ふ

固く兄弟の契りをかわした

虐殺への憎しみをあらたにも

温かい涙を流せるその日に向けて

厳寒の地に力強く根を張るために

ベトナム八月革命二六周年に寄せて

一九七一年八月九日記

八月のあの日

赤熱の太陽がふり注ぎ

空は何処までも青く澄み

偉大を闘いの勝利を予示していた

世界の強盗たちの反喰いは

疲労と消耗と

致命傷で終りを告げ始め

傷口から汚物を吐き出していた

ベトナム人民の血と肉で汚れ

ベトナム人民の恥辱で塗り固められた

強盗たちの汚物は

八月のまぶしい光の中で

白日の下にさらけ出され

醜く腐敗し

死期を宣告された

八月のあの日

赤い星の輝く中で

強盗たちの死の宣告は

ハノイでサイゴンで

農村で漁村で山岳で

無数の農民たちと

名もなき労働者たちの

鋭い闘いの雄叫びであつた

手に手に竹ヤリと棍棒と

少ないライフルと短銃の

人民の戦争の宣言であつた

ゆるぎない祖国への愛と

変ることのない民族への愛は

飢餓を忘れて

ジャングルを駆け巡り

劣悪な武器を克服し

劣悪な状況を乗り越え

輝かしい未来に向けて

人民の軍隊をつくりあげ

偉大な勝利への道を踏み出した

八月のあの日

白い夜明の光の中で

林立する真紅の旗波は

世界の新しい胎動を告げ

インドシナの夜明を宣言した

祖国への愛と奉仕に育くまれ

人民の創意と工夫に支えられた

英雄的ベトナム人民の闘いは

小国が大国に

竹ヤリが機関銃に

人民の軍隊がファシストの軍隊に

人民の戦争が帝国主義の戦争に

勝利することを示した

死を恐れぬベトナム人民の団結は

無数の道をジャングルに築きあげ

爆弾の雨の中

自転車輸送隊を送り出し

ディエン・ビエン・フーに勝利し

全世界に不屈の闘いを宣言した

一九四五年八月の闘いは

世界の強盗たちの死滅を宣言し

世界の新たな傾向を宣言した

そして、今なお

八月革命の炎は燃え続け

ジャール平原を焼きつくし

インドシナを被し

全世界に燃え広がっている

メモ

人民軍を創つたのは、歴史学のプロフェサーであつた、ボ・グエン・ザツ
ブ將軍です。大学の教師が実は素晴らしい人民の軍隊をつくり、戦争芸術の
天才になつたのです。全ての人民は誰でも革命戦士になれるのです。戦争の
最期の事を決するのは武器ではなく、人間であることをベトナム革命戦争は
我々に教えました。

米帝は戦略的に敗北し、戦略的に後退しています。ベトナム人民との真の
連帯は武装闘争を前進させることです。

南を知らない北生れの若いベトナムの革命兵士が死を恐れず勇敢にベトナ
ムで闘っています。

九人の戦士

挫折と苦難の春の日

虚飾に満ちあふれた

仮面の朝に一撃を加えた

九人の戦士

惰眠の朝に夜明を告げ

真紅の旗を高く掲げ

世界人へと飛翔した

九人の戦士

暗黒の氷の溶解を宣告し

春の息吹きを呼び醒し

苦渋の時代を切り拓いた

九人の戦士

明日の世界を廻すために旅立つた

我らの勇者

九人の戦士たちよ

君たちの打ちこんだハークンは

人民の海に深く喰いこみ

全ゆる呪詛を打ち壊しました

我らの勇者

九人の戦士たちよ

君たちの旅立ちには

日本の夜明の宣言です

血の弾圧を乗り越えて

我らも進みます

(トシキムルソン)
同志金日成に挨拶を!

夏の死

熱い夏の

無数のアリの行列は

地獄への葬列

白い仮面の女と

赤いバラの花は

失せゆく彼方の想い出を

星の喪服の熱情に秘め

一点の紙魚を坐視してる

熱い朝の白煙の行列は

天国への葬列

緑の山に這う

白ハスの花は

共に過した想い出を
白い夜明の熱情の中で
無数の紙魚に廻らせる

メモ

死にはいろんな死があります。ただ何となしに生きて死ぬのも死です。死に方とは生き方です。革命家は常に死の覚悟が必要です。ゲリラ闘争のこの時代は尙更です。死の覚悟とはいかに生きるのかということ。賃金奴隷の忠実な下僕に甘んじるのか、日和見の中のベッドの上で死ぬのか。たまたかいの中で倒れるのか、は生き方の問題です。少なくとも私はベッドや畳の上で死ぬことを拒否します。絞首台か街路こそ革命家にふさわしい死に場所です。プロレタリアには、ノスタルジャに浸る想い出は今はいらないのです。でも、勝つためにはあくまで生きつづけることが大切です。

転向

と、その時

崩れた意志は

無限に円を拡げ

点から線へ

平面から空間へ

錯綜しながら

円軌道を遊泳する

切断された結び目は
抵抗を失くし
奔放に自在に

力ある限り無限に向い
無数の自由をつれ戻す

やがて

明日を喪失し

欺瞞の自由へと飛翔する

果しない虚空に向けて

メモ

多くの同志たちが闘いの中で挫折し、転向しました。それ以上に多くの友人たちが闘いの前に消えていきました。彼らは何処へ行つたのでしょうか？ 賃金奴隷のこのブルジョワ独裁の社会で奴隷として生きていますのでしょうか？ プロレタリアに失なうものはありません。共産主義はイデオロギーである以前に人間の人間らしい生き方の一つなのです。賃金奴隷に自由は無いです。

夜の帳の中から

夜の帳の中から

声が出る

闘いのろしがあがる

暗闇に動めく

数しれぬ名もなき生物たちが

明日の光を求めて動めいている

夜明前に

崩れた廃虚の中で

父が死に母が死に

祖父が死んだ

もう、私は待たない

見せかけの整地をはぎとり

暗闇の底に亀裂をつくるのだ

でも夜明はまだ来ない

汗と血と涙の呪詛は

化粧もせずに地肌を見せて

消されても消されても

声をあげ

夜明を呼んでいる

全てを奪われた廃虚たちは

美しく着飾って

明日の光を探し求めた

でも生まれた故郷は隠せません

汗と血と涙の衣服からは

夜の帳の中へ

声が出るのです

「夜明へ、マダカノ」

熱い朝

熱い朝の夢は

煮詰った苛立ちに醒め

ただいたずらに

明日を忘れた峠を目指して

憤激の登山を用意し

ほとばしる生への熱情は

無数の精にすがりつき

熱い夢の中で

生への渴きを癒す

熱い朝の

醒めた苛立ちは

通過する時間を

無慈悲にさげすみ

嫌悪の海に溺れさせ

流れ出る汗を

倦怠と焦りに混ぜ

苛立ちに揺れる鑄型に流し入れ

惰性の虚像をつくる

メモ

男と女の虚しい、愛もなくなただ夫婦というそれだけの生活で、時々思い
駆けられたような性交渉は、苛立ちの解消にもならず、惰性の排泄です。こ
の何もない性交渉で創造されるのが小供なのです。

虚像でしかない虚像に愛があるかのごとくふるまう不毛な夫婦はコッケイ
です。管理され支配された恋愛と結婚には反逆が必要です。

疲れた都会の夜

灰色の壁と壁の

冷たいセメントの林立する

整然とした都会の町並に

生臭い人を喰った風と

怪しい艶のある音が

呼び合いながら動めいて

垂れこめた灰色の下では

歩き疲れた都会の夜が

重々しく身体にまとわりつき

酒をおびた顔は

虚飾の光に揺れて

虚しさに吐気を催している

錯綜したアルコールは

苛立ちに駆け巡り

疲れた都会の中で

無関心に過ぎ去る時間を

ひたすら追いつづけ

過去の顔を探し求める

疲れた灰色の壁は

無言で

力なく交錯する光に

疲れた都会の夜を映す

メモ

働いても働いても、少しも楽にならないブルジョワ社会では、その虚しさを一滴のアルコールに求め歩く。でもアルコールは虚しさを増しても何も解決してはいません。

都会での時間

疲れきつたビルの谷間を
さまよひ歩く仮面の群は
時間を失ない

明日を失なっている
あてもなく黙々と歩く

仮面の群の
美しく着飾つたその中は
骨を失なつた軟体動物の
虚栄のダンス

利奈利奈に響き渡る
けだるい音楽は

仮面の群れのダンスの
全てを包み
全てを忘れさせる
放心のメロデー

疲れた都会の中で
表情を忘れ去り
視覚を失なつた

さまよひ歩く仮面の群は
虚飾の時間に
全身を溺れさせ
残された時間を
ただいたがずに喰ひ潰す

メモ

一日中ラインに追われ、解放された夕方、せめての疲れの慰めにけなしの金を費やして、一瞬の虚栄にプロレタリアは溺れさせられる。でも、そこには何もありません。安らぎはないのです。残るのは虚脱感と倦怠だけです。

017

都会での休息

点滅する光の輪に

現われ消える人と人は

重さに崩れた肩を低く垂れ

虚ろな目で空を泳いで

疲れた足を地に這わしている

明日はなく 今だけを、と

ただ 一時だけでも燃焼するために

休息地を探し求め

模造の光に集まっつて

全てを吐き出す

往き交う人と人

関わりも無しに過ぎ去る時間

少かに造られた安息の一時は

深谷間の底の時間

固く灰色の壁に囲まれた

谷底の安息地は

点滅の光も

呼び声も届かない

メモ

ブルジョワ独裁の階級社会である限り、プロレタリアに休息はありません。
「生かさぬように殺さぬように」がブルジョワ独裁の原則です。でも、プロ
レタリアには無数のエネルギー源があります。プロレタリアの社会を建設す
るエネルギーは搾取されればされるほど貯るのです。

想す出

想い出は

過ぎた昔の

甘く幻想的な

メルヘンの世界です

想い出のふる里は

空が澄み

川が清み

全てが白く

全てが青く透明で

いつも皆が並んでいて

楽しいおしゃべりです

秋の日は

赤トンボに誘われて

桑畑を駆け巡り

唇を赤紫に染めました

夏の日ば

サトウキビをほおばって

蛙の歌の中

ホタルを追いました

春の日は

露に足をとられて

リングとすみれと

つくしんぼうをつみました

冬の日

木枯しに吹かれて

北風に遊び疲れ

堀コタツの中で

落花生を喰べました

想い出は

疲れた大人の

帰らぬ昔をなつかしむ

汚れの洗濯です

ふる里への郷愁は

想い出を

汚れのな

メルヘンにしますので

メモ

私の田舎は、三州は三河です。私の小さい時は戦後で何もなく、トウモロコシとサトウキビはおやつがわりに食べました。根元から手で折って固い皮を歯でむいて、甘い汁を飲んですってはカスを吐き出すのです。ゲバラ兄貴が革命とはサトウキビの切り口のようないい匂いがするといいました。サト

ウキビをおやつに喰べた私にはよく判ります。今でも、サトウキビで切った手の傷がたくさん残っています。

私の小さな時はプールはなく川で泳ぎました。泳ぎ疲れると岸辺の桑畑へ行き、桑の実をよく食べました。赤い実はショッパクで、紫色のは甘いのです。食べすぎると下痢をしました。落花生はピーナツのことです。炭火で焼き、皆で皮をむいて食べました。

小学校の頃、進駐軍がジープに乗って、ヒロポンをやめようとなりをたて年二回学校の校庭ではシラミをなくすため、頭からD・D・Tをかけられました。D・D・Tはガンのもとだといいますが、私たちはどうなるのでしょうか。

科学の悲劇もしくは二〇世紀文化の末路

生きることには疲れた人間たちと

生きることには慣れすぎた人間たちは

明日なんて要らないのさ

緑の山は人工で

あの山も人工さ

雨が造くられ

季節が造くられ

試験管の子宮で人間様の誕生さ

性交も 食欲も造られるのさ

性交も 睡眠も自由なのさ

科学という怪物が解決しちまつたんだよ

何もかもだよ

全てが全て 自由なのさ

自由 自由 解放されちまつたんだよ

何をしてもさ

何処へ行ってもさ

全てが 全てが自由 自由なのさ

全てが全て

お見透しというわけなのさ

で 俺たちは一体何なのだよ

俺たちは……………

俺たちは人間様さ

で 俺たちは何をしたらいいのだよ

俺たちは……………

……………

もう 何もないのさ

性交にも 働くことにも 遊びにも

何もかも 飽きちまつたんだよ

自由に 飽きちまつたのさ

だから疲れているんだよ 俺たちは

もう 明日なんか要らないのさ

生きることに疲れた人間たちと

生きることに慣れすぎた人間たちは

明日なんか要らないのさ

メモ

文革の過程で、毛沢東同志は工業の技術主義を批判しました。工業地帯を
まとめ、集中させ、強大化した方が生産効率も良く、良い製品ができます。

けれども毛同志はこれを否定したのです。どうしてなのか、ブルジョワ学者
や評論家には理解できませんでした。文化とか科学とは技術的に発達するこ
とが良いことだと考えていることの誤りを毛同志は実践したのです。

プロレタリアが自分の手で必要な品物を造り出し、新しい社会を創り出す
ことの素晴らしさを、ブルジョワの色眼鏡で見ると能率の悪い粗悪品しかでき
ない小さな工場をつくるのは時代錯誤だと思ふのです。どうして良い製品が
必要でしょうか？能率的生産とは何でしょうか？これは全てブルジョワ経済
学による価値観でしかないのです。無意味な競争です。

文革は偉大な人間改造です。私達も常に自己を整風して、ブルジョワ・イ
デオロギーと闘う必要があります。

進め赤い兵士よ

奴隷の鎖は錆びている

断ち切るのは今

我らの赤い血潮は

武器をとり

我らの友情は

死を恐れない

進め 若き兵士よ

進め 赤い兵士よ

明日を背おろ

自由の武器を握りしめ

抑圧の怒りは満ちあふれ

立上るのは今

我らの赤い血潮は

たたかいに耐え

我らの友情は

屍を越えて行く

進め 若き兵士よ

進め 赤い兵士よ

明日を背おろ

自由の武器を握りしめ

たたかいは炎は燃え上り

反撃するのは今

我らの赤い血潮は

銃を肩にかけ

我らの友情は

国境を越える

進め 若い兵士よ

進め 赤い兵士よ

明日を背おい

自由の武器を握りしめ

メモ

プロレタリアに国境はありません。闘うものは全て友人です。プロレタリアに失なうものはありません。あるのは奪いかえすものばかりです。もう賃金奴隷は嫌です。奴隷で死ぬ前に闘って死にます。

これに曲をつけてくれる人を探しています。日本の赤軍にも歌はあつてもいいものです。誰かつけて来て下さい。詩の利用は自由です。ただし、ブルジョワ・マスコミには禁じます。それ以外には転載も全て自由です。

第Ⅱ部 地獄の叫び声

安住の地を求めて／焦りと徒勞の間、又は独房の幻想／ピエロの一日、もしくは
は独房の一日／カゴの鳥／赤い小舟の舟出／私のスピロヘータ／呪われ人／出
発

「安住の地を求めて」

ここだけが安住の地だと
教えられたのは何時なのか
教えたのは微笑の幻の
第一番の使いの者だった

我を忘れた行軍の中へ
暗闇に紛れて声をかけ
甘いささやきと
温い息を吹きかけた
あの微笑の誘惑は
険しい曲りくねった行路の中で
疲れ果てていた行先に
我を忘れさせたのかも知れません

峠に咲く赤いバラの香りには
道を迷わす匂いがあり
地の底よりの登山者を
怪しい色香の世界に惑わせて
悪魔の霧の中に抱きこみ
再びの谷間に落とすのです
香りから逃れると
仮面を脱いだバラの精がとり囲み
偽りの哀顔を売りつけて
優しく触わる善の手に

毒をぬつた利欲のトゲで刺し
噴出し 煮えたぎる火口の中へ
生身のまま投げ入れるのです

何度目かの行軍と転落とで

もう地の底に帰りたくないと思うと

いつもの峠の手前で声がして

「つらかろう 苦しかろう」

「安楽な道を教えよう」

「安住の地を教えよう」

あの微笑の誘惑が待っていた

険しい行路を避けて横道に入り

斜めに下って目を閉じて

静かに上ってそれから下って下って

甘い香りのなすままに下って

優しく言われるままに

胸の中と頭の中と腹の中の

全てを開き 全てを吐き出して

甘いささやきと微笑の

安住の地の語りに聴きほれた

ふと気が付くと再び谷底で

かすかなバラの香りの残滓と

虚しい疲れだけを残されて

脱水症状の青白い顔が

よどみきつた水溜りにゆれ

ことが安住の地だとせせら笑う

あの微笑の使いの者の声が流れていた

ここだけが安住の地だと

教えられたのは何時なのか

教えたのは微笑の幻の第一の使いの者だった

「安住ノ地ハドコダノ」

「安住ノ地ハドコナノダノ」

「焦りと徒勞の間―又は、独房の幻想」

ある朝めざめると

鉄格子が無いのです

高い小さな窓から

かすかに注がれる白い光が

精神を隠す黒い棒を

何処かへかくしたのです

でも私は動けません

動こうという意志に逆って

汗を流してうめく私をあざ笑う

金縛りが居るにちがいません

早くしなくてはみつかつてしまふ

「何トカシナクテハ」

と 苛立ちます

でも私は動けません

焦っても焦っても

全身は硬くなるばかりです
声帯は眠りから醒めないで
無声ばかりが出てきます

「何トカシナクテハ」
と それでも諦めません

日が昇つて白さが薄くなり
空気が透明になりました
時間が逃げて行くのです
苛立ちの顔に油汗が出て
少しの望みの川をつくろりとしませ
けれどもすぐに消えてしまいます

「何トカシナクテハ」
と まだまだ頑張ります

やつとめぐり会えた機会を
何度も待つたこの時を
離したくないのです
だから一生懸命で
早くつかまなくてはと はやるのです
でも私は動けません
油汗に布団が滑るだけで
立つことも出来ません

まだ誰もやつて来ません
時間は残っているのです

どうしても私はでていくのです
だから

もう一度 もう一度

「何トカンナクテハ」

と 繰り返して試みるのです

もがいてももがいても

起きられません

少しも身体が動かないのです

あまりにも重すぎます

「アア！ 何テコトダノ」

「ドウシテナノダ？」

もうだめかもしれない

明るくなりすぎました

でも足音がまだないので

だからもう一度だけ

やってみるのです

動くかも知れません

「私ノ邪魔ヲスル奴ハダレダノ」

「金縛リニカケタノハダレダノ」

何とかしなくてはなりません

メモ

武装闘争に突入し、対峙段階の長い長い持久戦の第一歩に入った今日では、
獄外よりも獄内の方がずっと楽です。毎日グッスリ寝られ、たらふく喰って
一杯本を読めるのです。でも皆が皆、獄中でどのびり過したら革命の事業は
止まります。

ゲリラ戦の原則は、常に逃げ道を確保しておくことです。戦闘は奇襲戦で速決戦です。都市ゲリラ闘争で、三人一組の戦闘団が権力に追われたら、一人が逆に権力に向い、その間に二人が逃走すべきです。我々の第一歩は利己心の廃棄です。一人は万人のため、万人は一人のために尽くします。そのためには、捕まってはだめなのです。

「ピエロの一日、もしくは独房の一日」

真四角の固ゆかたまりの私の部屋は
朝陽でなく機械音で朝が告げられて
あわれな平和の使者のハト君が
瘦せたハト胸を翔いて始まります

本当に、本当におかしなことです
ここにも音楽が少しだけあります
今朝はおそろしく醜女の声で
一切の自由を剝奪された私に向つて
一日を事故の無いよう真面目にと説教して
花のバリのシャンソンを歌い
その次に枯葉をサックスのソロで聴かして
その又、次にワルツとタンゴを歌いました
でも、一人だけの部屋の中で
一人で踊るピエロは居ません
塩味だけが強いミソ汁を
血圧を気にしながらの音楽は
茶色の五等飯に溶けこめず
胃の中でだだをこねています

私はビエロではありません

四角の狭い中から眺められる屋近く

突然、胃袋を踊らせるマーラーが響きました

私の言葉から音を抜きとつて

ビエロを強いるこの四角の箱が

「復活」の響きを伝えたのです

何を復活するのでしょうか

それとも、四角の箱がビエロなのでしょう

本当に皮肉なマーラーの魅りです

でも、私はビエロではないのです

四角の箱の中に固く固められた

私の音を復活してくれるのでしょうか

貧しいハト君の悲しい声に

幸福を分け与えようのでしょうか

平和の使者のハト君は

痩せ衰えながらもビエロを演じています

ビエロを強いられた

ビエロでない人たちを慰めて

四角の箱の住人の食べ残しを

微笑をふりまいて監視の目を盗み

ビエロらしく

おもしろおかしく食べるのです

夕暮れの固い夜の訪れは

四角の部屋だけを明るくして

再びビエロになれと強いて来ます

赤いケバケバしい声と

青く疲れた死んだ声が

四角の部屋をかきまわして夜が始まり

ビエロにするための単純なメロディーが

何度も何度も意味のないことと一緒に

とどめもなく繰り返し返して流れます

でも私はビエロになれません

私は私なのです

私の欲しいのは音のある私の言葉です

四角の箱が消している私の音が欲しいのです

私はビエロになれません

私はビエロではないのです

メモ

九月の半頃から大拘では朝からいろいろな音楽を流すようになりました。シャノンソンにタンゴ、それに米民謡のオスザンナ、オールドブラックジョー等をサウンドトラックで聴かします

屋もFM放送の音楽を流します。ドボルザークの新世界やマーラーが流れた時は一瞬耳を疑いました。B・G・Mで独居者の抑圧不満を和げようというのかも知れません。でも少なくとも訳のわからない歌謡曲よりもこれらの音楽の方が少しはましです。

「カゴの鳥」

目をふさがれ

口をふさがれた

小さいカゴの鳥は

一方通行の耳だけで
活字と言葉の氾濫を
黙々と整理をしています

とじこめられてもカゴの鳥は

短かい短かい時間を

足慣しに走り廻り

わずかに見える大空に

いつの日か駆け巡る

希望の日を描き

何度も何度もその日进行

来たるべき日に備えます

再びの大空では

整理した言葉と活字を

全ての小鳥の経験に混ぜて

平和をおびやかす敵ども

大鷲とみみづくの来襲に

必らず応えることを誓って

静かな森

平和な山々に

美しい森の夜明をつくるのです

今は灰色のカゴの鳥

生きるだけのエサと水と

寒さをしのぐわずかな衣だけで

膨大な無声の言葉だけが

限りない明日の言葉で慰めてくれます

「赤い小舟の舟出」

果しなく広がる妄想の中に

浮沈する小舟は

赤い意志を黒の衣に揺すられ

虚しい言葉の競争の中

過ぎたつかみどころのない言葉を

明日の世界に合せてかじをとり

黒の本質の白色は

明日の中にある赤色と

血をしぼる色は何色が良いかと

とめどもなくつづく儀式の中で

あれこれと欺瞞の選択をする

やがて

冷えきつた悟りきつた黒い波が

さざめき打ち寄せて

わざとらしく威厳を持つて

小舟を揺り動かす方向を狂わせる

でも赤い舟は少しもおそれない

とぎれとぎれの妄想の合間に

流されて顔を出す遊びの言葉

「明日ハ晴レルダロウカ！」

「明日ハ声ガ出セルダロウカ！」

限らない分裂と亀裂の行進の

果しない地の底からの航海は

おびただしい言葉の氾濫の中
たつた一つだけの言葉の意味を求めて
果しのない妄想の世界をのぞき見て
一席は恐しさに心をふるわせながらも
赤い意志に勇気づけられ
小舟は今日も一人出て行く

メモ

革命家がブル裁判を受けることは一つの敗北です。でも革命が成就するまで敗北はつきものです。その度に嫌でもブル裁判を受けなくてはなりません。革命家にとって裁判は新しい明日への決意です。

あのもつたいぶつた前近代的な黒の法衣を見る度に私は笑いがこみあげて来ます。ブル法の法の權威とは所詮あの法衣にしかすぎないのです。戦前、戦中、共産主義者、反戦主義者、平和主義者、なかんずく宗教家まで獄中にたたきこみ、殺した司法者は、日共のいう解放軍の米帝軍からも何のとも受けていないのです。法の責任は誰が負うのでしょうか。

「私のスピロヘータ」

怨念のこめられた厚い壁の割れ目から
ほとぼしり出るは忘れられた想いでしょうか
瓜を立て最後の生の印をと
傷つけ彫られた血文字は
純な白紙の心の上申書かもしれません

ある朝の寒い日に

土足で私の中に踏み込んだ

無数の勢いこんだ不条理は

有無を言わずに私を外に連れだして

汚れた薄空に照らしての裸体の検査

スピロヘータは何処に行つたのですかと

たんねんにたんねんに虫眼鏡でのぞき

毛穴にまで目を入れ覗いた

でも見つかりません

不条理の検査官はすつかり怒り

私の赤い肉と白い肉をそぎとつて

白い肉は不合理のくんせいに

赤い肉は合理的なバターのためにして

私のスピロヘータを

いぶしだそうとするのです

でも私のスピロヘータは出て来ません

私の中の心を土足でかき乱し

身を汚し辱しめた

熱湯と油と鮫物の薬品は

明日の朝を浴かしただけです

でも私のスピロヘータは生きています

私のスピロヘータはとつても強いのです

ベニシリンも

シグマイシンもへいつちやらです

だから私は好きなのです

長い長い間苦しめられ蔑められ

いじめられて鍛えられて成長して

かえすがえすのうらみつらみを貯えて

黒いジメジメしたこの中に

一心に生きて来たのです

だから私は

ほとばしる生への熱情を

固い壁の中におさえつけ

閉じた中に幻の明日を漂わせ

壁に厚く怨念をぬりこめて

地の底から湧き出る呪いに混ぜ

私のうらみつらみを何度も越えて

射精するのです

徒勞の波の打ち寄せる

汚れた厚い壁の中に

呪われた者たちの呪いを刻んだ

私のスピロヘータは

忘れられた者たちの生の証しを印し

明日を棄てずにひたすら

人間たちへの呪いの毎日を過すのです

「呪われ人」

天に呪われ 地に呪われた

呪われ人は

明日の糧を得る手足を奪われ

常時も生命の危機に立たされて

地の底に流れる雨水と

逃げまどう青草を食べ

痩せ衰えて生きながらえている

天に呪われ 地に呪われた
呪われ人は

失なうものを失なつたその中で
それでも氣力をふりしぼり
絶望の底に汚物をふりかけて
最期の最期まで生き続ける
こんな呪いの世界でも

呪われ人の呪いをこめた
うらみつらみのあえぐ声が
天の呪いに和して空に拡がると
激怒した地の呪いが荒れ狂い
呪われ人を二重三重に取り囲み
痩せ衰えたその身体から
血肉をそぎとり人汗をしぼる

だがしかし 呪われ人は
地の呪いに立ち向い

最後の一滴の鮮血まで呪い返す
「失ウモノハ何モナイ！」

天を赤黒く焼き焦す
呪いの呪いに囲まれた
痩せ衰えた呪われ人は
骨を砕かれてもそれでもなお
自分の生の端を離さずに
失なわれた失なわれものを

取り戻すため
ふりしぼりふりしぼり全身で

呪われ人の前に微笑で現われる
美しい神秘の仏の教えも

美人のベアトリーチェの先達も

呪われに囲まれた呪われ人は
とりおさえてあざ笑い

地獄の使者の化粧をほどこして

呪われ人の肥溜に投げ入れる

呪われに囲まれた呪われ人は

絶望が自殺して

失望が夜逃げをする

呪われ人の現実の中で

呪いの呪いを呪い返し

呪いの中に生きつづける

「失ナウモノハ

何モナイ」

メモ

中学の時、ダンテの神曲を読んであこがれました。高校の時はふきだししました。大学の時は腹が立ちました。天使のベアトリーチェは悪魔の使者です。ペルーに居た六〇〇万のインディオは、今は六〇万人しかいません。キリストの名の下に殺されたのです。

インタールの歌詩の初め、日本語の訳は「立てうえたるものよ」ですが、原語はボティエが作詩した通りで「地に呪われたものよ」という歌い出しです。F・ファノン著作に「地に呪われた者」というのがあります。アルジェリア革命を分析したものです。プロレタリアは呪われた人々なのです。

「出発」

死線の上に私を立たづませ

つかの間のあの日の出来事を

もう二度と帰らせんと

誰が宣言するのでしょうか

さようなら 恋人よ

さようなら 故郷よ

メラメラと燃え上る

新しい生命の息吹は

旧いふる里を断ち切り

古いきずなを捨てさせ

崩れさらんとしている

台地を打ち

出発するのです

でも いつの日か

新しい想い出として

この原点に向けての門出を

覚えていて欲しくは

ないのです

かなたの昔の祭パヤシも

この原点の中で消失し

今はただ

いまわしき過去の

全てを洗い直し

原点をめぐる死線の上で

終つた恋人への

言葉を燃すのです

さようなら 恋人よ

さようなら 故郷よ

果しない拡がりの中への門出は

二度と帰らぬ未知への舟出

かわいた喉をうるおす泉と

峠を越えた彼方の楽園を

一途に求め探して

目の見えぬ言葉

の無い死線の上を

ひたすら進むのです

さようなら 恋人よ

さようなら 故郷よ

祈りの言葉も

慰めの言葉も

故郷の氏神の社の杜に捨て

長く育くまれた

ふる里の味だけを

朝日の中で確かめ

亡者の声のない大地に向け

新しい生命の息吹を

この腐臭を放つ

想い出に印して

原点に向けての

死線の壁にのぞむ

門出とするのです

今はただ原点へ

帰る道中の

荒れ狂う死線の

前後の中で

枯れることのない

生命の泉を想います

もう生暖い

ふる里を忘れました

はにかみのない慣れた

偽りの日々を捨てました

さようなら 恋人よ

さようなら 故郷よ

もう二度とふり向かないで

出発します

メモ

私達が革命家を志す時、いつも種々の魔手がのびてきます。でもそれを振り切つて進むのです。足をひっぱる恋人には別れを告げ、親兄弟を捨ててある時はいかなくはなりません。革命家は、ある時にはスーパーマンになることを要求されます。

でも行かなくてはなりません。これ以上歪んだ歴史を生み出すことは人間への冒瀆です。明日のために我々は進もう。

第Ⅲ部 戦場へ

断篇そのⅠ 戦場へ — 成田三里塚農民に捧げる／断篇そのⅡ 闘いへの出発
忘れたい朝／不安な朝が来た、またはファシズムとのたたかいの序章／断篇そ
のⅢ ゲリラの秋へ

断篇そのI

「戦場へ―成田三里塚農民に捧げる―」

赤軍兵士 福岡信孝

一九七一年一月八日大阪拘置所にて

荒れ狂り暴虐の嵐の中を

一途に駆ける旗波は

倒されることを恐れずに

傷つくことをかえりみず

限りなく大地を愛し

全身を大地に捧げ

大地に育つた

生きた農民の魂がこめられている

房総の原野に切り開かれた

血と汗の結晶の土地を

一言のことわりの言葉もかけずに

ただ お上の紙片をふりかさし

奪いつくすのは誰だ

血のしみこんだこの大地を

汗と涙で形づくられたこの畑を

農民のぬくもりに育つ作物を

奪いつくすのは誰だ

限りない作物を産み出し

快い自然の匂いがする

この優しい大地を

一片の形式の紙片で

奪いつくすのは誰だ

農民の身体である大地を
耳をつんざき頭を狂わせ
人の血をもてあそぶ
怪物吸血鬼の住家に
どうしてできようか
欺瞞の声を恥もなくさらけ出す
仮面をかぶった犬どもの声には
もう返す言葉は何もない
いざ たたかえ

この大地には
数十年の汗がしみこんでおり
農民のぬくもりが生きている
この大地には
数十年の農民の歴史が息づき
地に生きた闘いの跡が印されている
それなのにどうして
たつた一片の血のない紙片で
たつた一回の形式の宣言で
出て行かなくてはならないのだ
今 房総の原野は
地に生きた人間の別れの言葉が
静かに熱い決意と燃えあがり
地と共に生命をもやす農民の息吹が
激しく胎動し
更なる闘いへの出発を始めた
地を育み地を愛し

地と共に苦しみ喜んだ

生きた農民の魂が

六年有余の長く苦しく

そして敵しく短かかったこの闘いを

新しい明日への闘いの道へと昂めたのだ

今 芝山の野は戦場と化し

火炎ビンが炸裂し 石が飛び

竹ヤリが血のりに光っている

芝山の戦場は烈火の炎で燃えあがり

埋りに埋つた闘いのエネルギーを放出する

だが 闘いは始つたばかりだ

たたかいは勝利の日まで

たたかいは社会のある限り

たたかいは死と生の

芸術作品をつくりつづけるのです

いざ たたかいへ

断篇そのⅡ

——闘いへの出発——

荒々しい雲行の中で

じつと耐え

一歩一歩進む

一条の赤い光の流れを

よどむこともなく無心に進む

明日への行軍は

全ての私心の払拭された

飾りない美しさにあふれ
明日への道を目指している

たたかいへの出発は始まった

探しあてた谷川のせせらぎを朔り
行軍は進む

片側を流れる谷川は
快よく響き

しばしの憩いの中に疲れを癒し
闘いへの旅路を慰さめる
だがしかし

そそりたつ山の背は
断崖絶壁の中に

谷川を押し込め
あくまで厳しく険しく
雲を突きさす山々は

時として微笑はしても
その笑いの中で

谷底へ突き落とし
無限の抱擁で凍死させる
気紛れを秘めている

山肌から流れ下る
快い谷川のせせらぎも
ある日突然に荒れ狂い
全てのものを飲み
全てのものを砕く

だが出発は始まつた

一条の谷川を越え

峠から峠からの渡り道

ここにはおそろしく

気分屋の霧が

怪しい雲行の流れを

支配じていた

大切に温めて運んで来た

一条の光を

情容赦なく吹き消し

進入者を混乱に陥し入れ

峠に湧く私心のガスに包み

利欲の種を植えつける

そしてさらに

峠と峠の境い目の

少しばかりの美しさと

少しばかりの

眺望の良さは

見慣れた一条の赤い光を

虚飾の光で惑わせている

だが行軍は進む

やっと越した目前の頂の

その向うには再び

山が連なり

険しい谷間を縫って

幾条かの谷川を作っていた

出発は始つたばかりであつた
闘いへの出発は

頂から頂へと進み

幾たびかの出発を重ね

いくつかの花の

咲き乱れる丘を通り

若草の大地を横切り

再び三度の苦難を

谷川のせせらぎに流しつ

明日の世界の日まで

休みなくつづけられる

「忘れたい朝」

忘れたい朝が来た

全てを失つたその時から

もう私には

朝に会う顔がないのです

それなのに

忘れたい朝が来た

あの人が去つて

光明が消えた今

もう私には

朝を迎える

勇気がないのです

それなのに

私に何の

用事があるのでしょうか
私に何をせよと
いうのでしょうか

まぶしい朝日の下で
忘れた過去を

曝けというのでしょうか
それなのに

忘れない朝が来た
何もかも終った今

全てを失なつた今
私には朝と話

言葉がないのです
今の私には

白い夜明は
生気の始まりではなく

生命の最後の
とどめをもたらし

忘れた過去の
胸をあばくだけなのです

それなのに

忘れない朝が来た
全てを露わにされた今

もう私には
隠すものは

何もないのです
全てを忘れたい

彼方へ置いて来ました
もう何もないのです

「不安な朝が来た」

――またはファッションとたたかひの序章――

一抹の不安の中に

朝が来た

白々しく明日を連れて

朝は来た

数々の辛酸を

数限りない虐殺とを

不安の朝は

忘れたのだろうか

見えない明日は

あの虐殺を

狂言の語りと

さうなのであろうか

ありと全ゆる

網の目を張り

ありと全ゆる

吸血盤を備え

骨の隅々からの

収奪は

神の御心に

従ったというのだろうか

だがもう欺されはしない

不安を朝の中でも

少しづつ少しづつ

目が慣れて

今では暗闇に動めく

あけない明日をつかまえ

見えない叫びの中に

父と母と

祖父と祖母の

地を埋めつくした

無数の屍を

見ることができるのです

しわを寄せ

秘めた苦しみに耐え

蝕まれた身体をひきずる

忘れられない姿の明日を

不安の朝に見るのです

そして今

一抹の不安の中に朝が

白々しい朝の中に

明日を連れて

虚空の光を照らし

ありと全ゆる

物の在り方を

ありと全ゆる

物の行方を

ありと全ゆる

思想の中味を

無限の擬似の

希望に似せて

微笑を放出しつつ

坐っている

今度 は 白日の下で

見えない虐殺をうまくやり

匂いのない香りを作って

無臭の毒を盛ろうと

あるいは

まぶしい光を浴びさせて

感覚を狂わそうと

いうのだろうか

だがもう欺されない

不安の朝の中に

神の御心も恵みも

たつた一片の恩恵も

捨て去つたのです

不安の朝に

もう祈りはしないのです

断篇そのⅢ

「ゲリラの秋へ」

澄んだ秋空の下で

疾風のように駆け巡る

無数のゲリラたち

姿を変え

形を変え

都会の雑踏の中

現れては消え

消えては現われる

勇敢なゲリラたち

変貌自在のその闘いは

澄み切った青空のように

迷いのない

革命への確心と

ゆるぎない階級への

愛に根ざし

一切の私心を捨て

明日の朝に向っている

季節の巡りに

逆流する

抑圧と暴虐の

嵐を起こす

支配者の台風は

もう力が

つき果てている

人民の無言の抵抗は

日増しに拡大し

政治の壁を打破り

新しい明日を渴望し

支配者への不信は

国家の全てを

懐疑し始め

無数の人々が海と化し

人民の海をつくり出している
そして今

いかなる暴虐の嵐にも
恐れずに乗り切る

勇敢な舵手を乗せて
人民の海に

航海が開始された

二年余の苦闘を

経たこの秋

無数のゲリラたちは

欺瞞の虚構の上に築かれた

抑圧の社会に育ち

荒れ狂う

暴虐の嵐の中で

全ゆる弾圧を

栄養に成長し

厳戒の血の

圧政に鍛えられた

今ゲリラたちは

都会の雑踏の

中を駆け廻り

爆弾を抱えて

現われては消え

消えては現われ

支配者のひざもとに

導火線をつけた

爆弾となつたゲリラたちは

人民の海に住みつき

変貌自在の怪物と化し

支配者の臓腑を蝕ばみ

全ゆる所を喰い荒し

全てのものを養分として

すさまじい繁殖力で

増えている

疲れを知らぬ

ゲリラの精力は

つぎつぎと

ゲリラを産み

明日の世界を

ゲリラの世界へと

向わせている

再びの秋は

ゲリラの秋へと

人民の怒りは燃え上り

澄み切った秋空を

赤く染め

死滅することのない

ゲリラの卵が

この丸たかいの熱で

かえらんとしている

革命への赤い情熱で

明日の世界を廻すために

赤軍詩集

1.1972

連絡先

福岡君を奪還する会 大阪府吹田市千里山関西大学構内

関西モップル社 大阪市浪速区下寺町4-7-4 フジタビル 633-3649

¥ 300